

楚墓から漢墓へ

—埋葬施設における開通志向の実現—

黄 曉 芬

【要約】 秦漢帝国による全土的統一以前、長江中流域に広がっていた楚の文化は墓制や埋葬施設の上でさまざまな特色をもっていた。計画的な古墓群、東・南頭位と上げ底棺、複雑な槨構造などがその例である。楚墓はまた槨の複雑化に伴って、槨内仕切板に模造門扉を発生、発達させ、他地域に先がけて槨内開通が達成された。これは槨の密閉性という伝統を打破する動きとして注目される。漢代以後、前述の戦国時代楚墓の特色の多くが失われる一方、槨の複雑化と槨内開通への志向性は受け継がれ、また統一によって、むしろ他地域へと波及する。大型墓では槨の内外が開通し、ついに支門を成立させ、遅れて中小型墓も墓道と槨内とが開通するようになった。これが、墓内に祖先祭祀を持ち込み、埋葬空間の立体化と祭祀前堂の創出を発達させた典型的な漢墓が成立するための素地となったのである。漢代に確立したこの新たな祖先祭祀は、漢帝国による儒教的支配の浸透とも読みかえることができる。

史林 七八卷五号 一九九五年九月

はじめに

長江の中流域はかつて古代中国の楚文化が開花した地域であり、呉越文化・巴蜀文化とともに、長江流域の三大文明区域の一つとされている。楚はもともと東方の越族の一枝と言われ、殷周王朝の付属国として存在していたが、春秋戦国期に政治、経済、文化などあらゆる面において高度な発展を遂げ、中国南方の最も代表的な文明地域となった。

楚と楚文化に関する研究は、一九二〇年代初めに楚の青銅器が認定されて以来、しだいに盛んになった^①。そして一九五

〇年代から一九七〇年代にかけて楚の郢都紀南城、および湖北省・河南省南部・湖南省などで楚墓の発掘調査があいつぎ、楚墓の資料が蓄積されるようになった。それによって楚の青銅器や陶器の型式学的研究が一段と進み、湖南省の一部の地域については楚墓の編年も試みられた。^②一九八〇年代に入ると楚墓や楚の遺跡の調査がますます盛んになり、楚墓や楚の遺物の型式学的研究、出土した文字資料による楚墓年代の同定、郭徳維の江陵楚墓についての考察^③、陳振裕による湖北省の楚墓の総合的概述など、地域ごとの楚墓の分類と研究も次々に発表された。^④こうして楚文化の様相および地域ごとの楚墓の解明は着実に進んでいった。それと同時に日本の研究者らも同様に文献の考察や考古資料の検証を通じて、楚の地域色と周辺文化との関係や楚墓^⑦および楚墓の副葬品に関する検討など、様々な視点より研究を進めていった。^⑤

しかし、楚の遺物に関する研究に比べると、楚墓の研究は一部の地域を除いていまだに不十分なのが現状である。とくに楚墓の型式分類において、分類のための分類に陥る傾向が少なくない。そのために、楚墓に関する考察と認識は表面的なものに留まっている感は否めない。また、楚国が滅亡した後の文化動態や楚墓と漢墓の接点などについては、従来ほとんど触れられることがなく、研究上の空白域と言っても過言ではない。

これまで筆者は漢墓における埋葬施設の変遷過程を、型式学的視点から明らかにし、柳墓から室墓への漢墓の変容を考察した。^①これは全国的な視野で論じたものであったが、本稿では、地域の墓制に目を向けることによってこの変容を具体的に検証することを目的とし、同時に上述の研究の空白域をも克服したい。そのために、まず調査資料や楚文化の研究成果に基づいて楚墓の特徴を明らかにし、その中でも特に埋葬施設の変化を重視して、戦国時代楚の墓制から漢代の墓制への転換の様相を検討する。これにより、これまで明かされていない楚文化と漢文化の接点をさぐり、漢文化がどのように地域文化を取り込もうとしていったのか、古代文化の交流と融合の一樣相を浮き彫りにしてみたい。

① 倉俣超「楚文化的発現と研究」『楚文化考古大事記』の「序」、文物

② 湖南省博物館「長沙楚墓」『考古学報』一九五九年一期。高至晋「試論湖南楚墓的分期与年代」『中国考古学会第一次年会論文集（一九七

九年)』文物出版社、一九八〇年。

③ 郭德維「江陵楚墓論述」、『考古學報』一九八二年二期。同「楚墓分類問題探討」、『考古』一九八三年三期。

④ 陳振裕「湖北楚墓論述」、『湖北省考古學會論文選集』一、一九八七年。

⑤ 高応勤、王光鍋「当陽趙家湖楚墓的分類与分期」、『中國考古學會第二次年會論文集(一九八〇年)』文物出版社、一九八二年。彭浩「楚墓葬制初論」同前。陳振裕「略論九座楚墓的年代」、『考古』一九八一年四期。王善才「鄂東楚墓論述」、『湖北省考古學會論文選集(一)』一九八七年。曹桂岑「淮陽楚墓論述」同前。郭德維「楚墓的發現和研究」、『楚文化志』一九八八年。王從礼「楚墓葬制分析」、『江漢考古』一九八八年二期。

⑥ 間瀬取芳「戦国時代楚文化の中の鼎と敦——周辺文化との関連を主

一 楚墓の特徴

紀元前五〇三年楚の昭王が遷都してから紀元前二七八年秦に陥落されるまでの間、楚の郢都が営まれたのが湖北省江陵地区であり、ここが春秋後期から戦国中期にかけて楚と楚文化の発展と繁栄を遂げた舞台となった。ところが、紀元前二七八年に秦に攻められ、楚は国都を河南省淮陽に移し、陳都としたが、その後衰退はとまらず、紀元前二四一年に安徽省寿県——寿春へ再び遷都したあと、紀元前二二三年に秦の強大な軍事力の前に楚国は滅亡した。郢都をはじめこの三つの都の置かれた江漢平野、河南省南陽地区、そして安徽省西部の一部及び湖南省長沙周辺の各地域は、各時期に楚の中心地として存在し、楚墓が多教調査されている。楚文化はこれらの地域を中心に大きく広がっているのである(図一)。

眼にみる——」、『古史春秋』第三号、一九八六年。小沢正人「楚文化

拡大の「様相」(早稲田大学)、『紀要』別冊十六、一九八九年。西江清高「春秋戦国時代の湖南、嶺南地方」、『紀尾井史学』七号、一九八七年。佐藤三千夫「楚の江南への進出について」、『東洋史研究報告』四、一九八七年。

⑦ 佐藤三千夫「楚墓についての一考察」、『茅茨』創刊号、一九八五年。山下志保「楚墓の基礎的研究」、『古文化談叢』第三〇集(下)、一九九三年。

⑧ 小沢正人「東周期副葬礼器の表すもの」、『古代』八八号、一九八九

年。
⑨ 黄曉芬「漢墓の変容——槨から室へ」、『史林』第七七巻第五号、一九九四年九月。

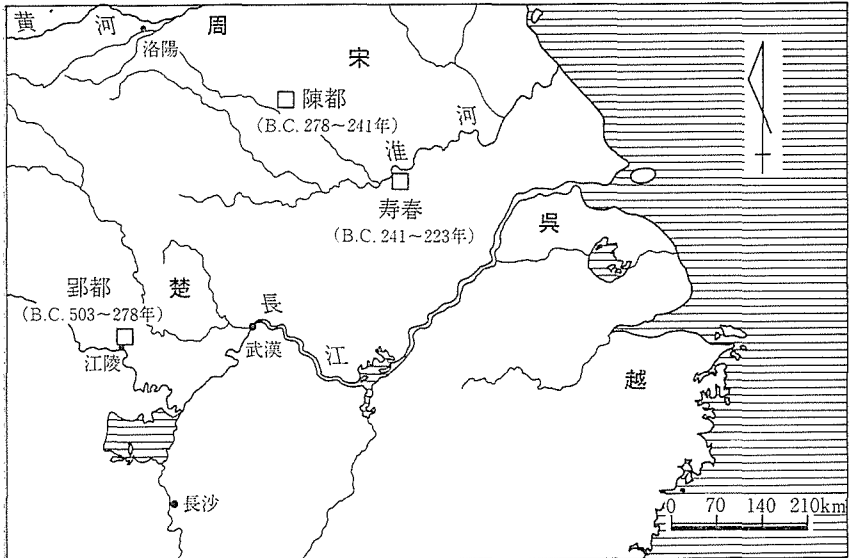


図1 春秋戦国期の長江中下流域

1 墳丘と墓壙

江陵の郢都紀南城周辺に現存する墳丘墓は約八〇〇基にのぼる。ここには墳丘の底径八〇〜一〇〇メートル、高さ一〇メートル前後の大型墓や、底径約三〇、高さ七メートル前後の中型墓、無墳丘の小型墓が、計画的にしかも密集して築かれている。春秋中、後期の河南省浙川下寺楚墓地^①では、一つの地区に計二五基の大、中、小型墓が五群に分かれて存在し、それらが南から北へ順に配置されている。各群には主となる大型墓が一基あり、大型墓の南北両側に中型の陪葬墓が並び、個々の墓にはそれぞれ小型の陪葬墓が伴っている。そのうち、第三組M二の被葬者は楚の令尹である子庚と推定されている。この計画的な配置は、中心的な存在である大型墳丘墓が被葬者の生前の社会的地位と身分をそのまま示すもので、従属する中小型墓はその直系親族墓と考えられる。それは、文献に記載されているような周代の族墓制が楚地域に根強く存在したことを物語っている。

埋葬施設は地下に構築され、竪穴式墓壙の四壁に二段〜五段の段築をもつのがその特徴である。例えば、湖北省江陵天星觀の大型楚墓M一^②では一五段、湖南省湘鄉牛形山M二、M一^③はそれぞれ九段と五段、楚王墓と推定される河南省淮陽馬鞍山

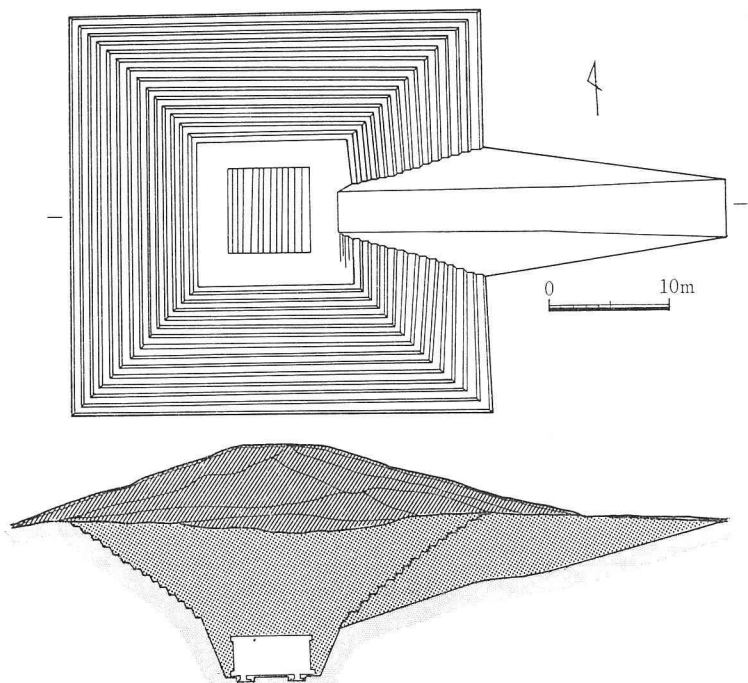


図2 楚墓の段築墓塚 湖北省包山M2

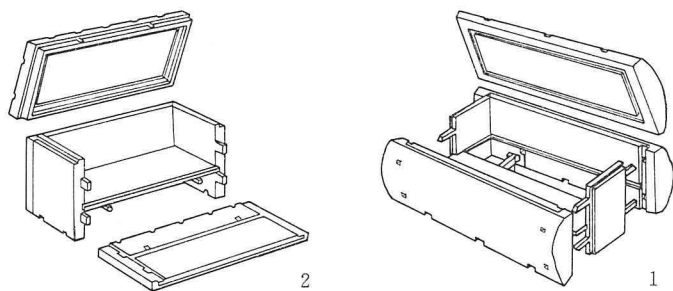


図3 楚墓の棺

1. 円弧形棺：湖北省江陵雨台山M554 2. 箱形棺：湖北省当陽趙家湖楚墓

M二とM一^④ではそれぞれ七段と五段である。段築各段の高さや段ごとのテラスの大きさは比較的一致しており、墓の規模が大きければ大きいほど段築数が多くなる。この段の高さは人の身長を大きく越えるものはまれで、段築が墓作りの作業のために安全性を意識して作りだされた可能性も考えられる。しかし包山楚墓M二^⑤では、墓壙四壁に高さ〇・四〇・八、幅〇・四〇・七メートルの段築が一四段もある（図二）。緩やかな墓壙壁面にこの段築表現を細かく作り上げており、それが楚墓の構築法として定式化していたことを示している。

2 棺と埋葬頭位

楚墓の棺は通常の木棺とは異なって、棺の底板を高い位置で側板に嵌め込むように組み立てられたもので、いわゆる上げ底になっているのが特徴である。また、江陵雨台山の五五八基の楚墓の木棺のように、両側板と蓋板の外面が断面円弧形を呈する円弧形棺（図三一）も目立つ。あわせて図示したものは、湖北省当陽県趙家湖楚墓^⑦の上げ底の仕組みをもつ箱形棺の例である（図三一）。そのほか、中型墓以上では、木棺内に透かし彫りを施した一枚の板を底板に重ねるように入れるか、あるいは棺の底板の代わりに「芥床」がよく見られる^⑧。

棺の埋納法の特徴としては、同一槨内に複数の木棺を同時に入れることの多い点があげられる。たとえば湖北省当陽曹家崗M五や安徽省六安県蔡廠M二^⑩では、大棺のそばに二つの小棺を置いている（図四一）。また、同隨州市擂鼓墩「曾侯乙」墓^⑪では、「曾侯乙」専用の大棺のほかに、計二個の小棺が槨内の二箇所に分けて置かれていた。この種の埋葬例では、大小の棺の寸法の差や装飾性、そして副葬品の量と質の差がきわだっており、両者の身分は対照的である。おそらく、大棺の被葬者がこの墓の中心的な存在であるのに対して、小棺の持ち主はそれに従属し、同墓壙に同時に埋葬された殉死者と推定される。

別の複数棺埋葬の例として、湖北省潛江市龍灣小黃家台M六^⑫のように、同一槨内の中心に二つの同大の棺を並置したも

表1 楚墓の埋葬頭位一覧表

	調査地点	基数	南(%)	東(%)	出典
湖北省地区	江陵雨台山	558	369(66%)	69(12%)	『江陵雨台山楚墓』84.
	雨台山(2次)	73	46(63%)	11(15%)	『江漢考古』90.3.
	江陵拍馬山	27	19(70%)	3(11%)	『考古』73.3.
	襄陽山湾	33	31(94%)	1(3%)	『江漢考古』83.2.
湖南省地区	益陽	39	14(36%)	12(31%)	『考古学報』81.4.
	資興旧市	80	17(21%)	30(38%)	『考古学報』83.1.
	保靖四方城	12	10(83%)		『湖南考古学輯刊』3.
	長沙周边	500	141(28%)	203(41%)	筆者の集計による

のがよく見られる。この場合には、木棺の規格や副葬品の数量、組成などにあまり大きな差が認められない(図四―2)。河南省浙川下寺楚墓M八や江陵雨台山M四六三、同宜陽鼎蔡坡の戦国楚墓M一〇^⑬などもその例である。龍灣小黃家台M六では、並列して埋葬された二人が人骨や副葬品から成年の男女であると判明しており、この種の複数棺の埋葬は夫婦の同塚埋葬の可能性が高い。これまで、「夫婦同穴」の埋葬風習は、後漢期以降の横穴系室墓が成立したあとの現象と言われてきたが、楚墓における同規格の複数棺の同塚埋葬が夫婦であるとすれば、漢代以降帝王陵墓の埋葬制度にまで影響を与えた「夫婦同穴」の祖形が楚墓にまで遡ることになる。

一方、楚墓の埋葬頭位は、表一にまとめたように中小型墓の場合には、東西南北それぞれあるが、主に南向で、次いで東向が多いことがわかる。これに対して、江陵天星觀M一、包山楚墓M一・M二、湖南省湘鄉牛形山M二などのような大型墓ではほとんどが東向で、楚の令尹子庚の家族墓地と判明した先の河南省浙川下寺の二五基の楚墓でも、不明の一基を除きすべて東向である。すなわち、楚公貴族の直系墓地の墓ではみな頭位は東向をとっているのである。

『楚辭』「九歌」の「東皇太一」「東君」などの楚の祭祀儀礼に関する記載、および後世の学者らの論考などによれば、楚人は「東君」いわゆる「日神」を祀っていたようである。楚墓とくに大型楚墓が東向をとるのは、この楚自身の信仰神——日神と関係するのかもしれない。

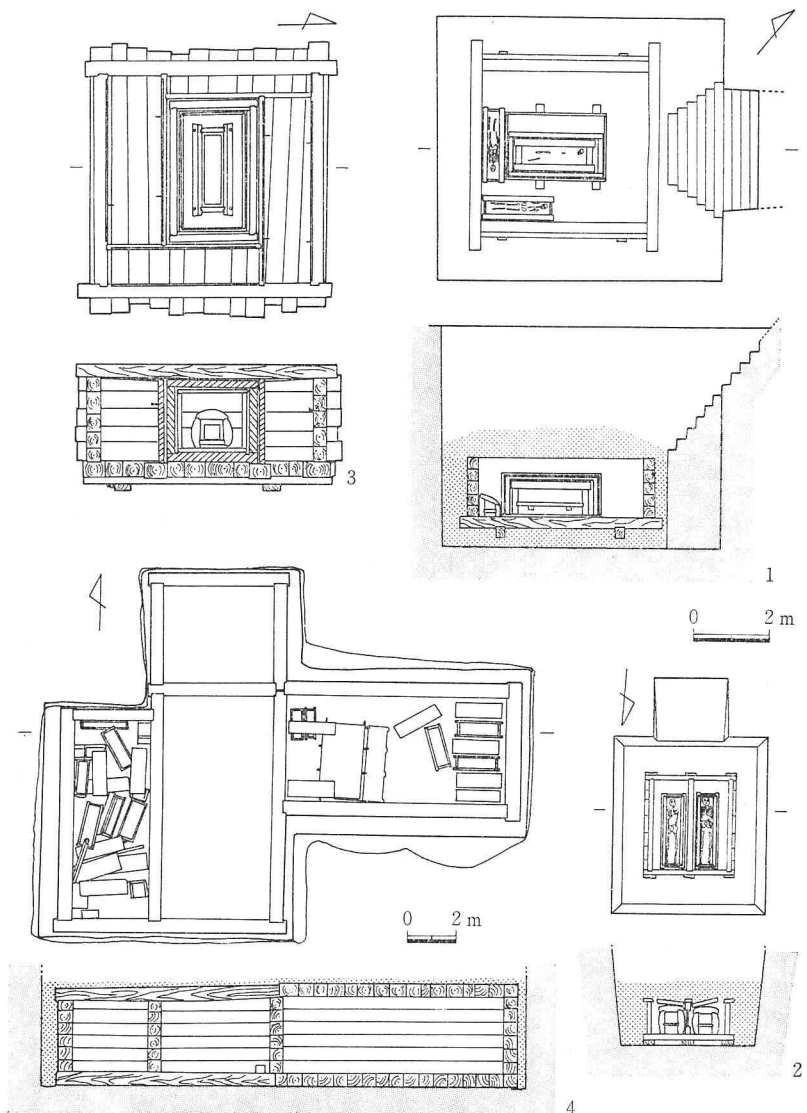


図4 楚墓の槨

1. 箱型槨：安徽省六安県西窯廠M2
2. 間仕切型槨：湖北省潜江县龍湾小黄家台M6
3. 間仕切型対称式槨：湖北省包山楚墓M2
4. 箱型複合式槨：湖北省随県「曾侯乙」墓

楚墓の槨は基本的に堅穴式墓壙の中央に二本の地覆木(枕木)を入れて、その上に底板を敷いてから四面の槨壁を組み立て、最終的に蓋を閉める構造になっている。他地域と同様に、箱型槨と間仕切型槨という二通りの槨構造がみられるが、この地域では構造の複雑化が顕著に認められる。

箱型槨は臨澧太山廟楚墓^⑦に代表されるような単独のものと、複合式のものに分けられ、後者はさらに分離複合式と連結複合式とに分けられる。分離複合式は、遺体を埋葬する空間と副葬品を埋納する空間を別々に組み立てるもので、光山県^⑧の春秋前期末の黄季佗父墓^⑨が代表的である。これに対して、連結複合式は、一つの箱型槨をもとにしてその槨壁を共有し、隣接する箱型槨を付け足すもので、戦国前期の「曾侯乙」墓がその好例である(図四—4)。

間仕切型槨は、槨内の埋蔵空間を有効に利用するため、仕切板を用いて被葬者の眠るスペースといくつかの副葬品用のスペースに区切っている。その最古の例が春秋期の楚墓に存在することから、間仕切型槨は楚で考案されたものと見てもよからう。こうした仕切板で区切られた埋蔵空間に関して、湖北省包山楚墓M二の木簡文書の「遺策」に「廂尾之器所以行」という記載があり、当時の人々は槨内に仕切られた空間を「廂」と名付けていたと解釈できる。このことから本稿では間仕切型槨内部の各スペースを、棺廂、頭廂、側廂などと呼ぶことにする。槨内の各廂の配置によって間仕切型槨は、さらに非対称式と対称式の二型式に分けられる。非対称式は棺廂を主として頭廂のみか、あるいは頭廂と側廂に設けるもので、江陵雨台山M一六六、M一六九のように二ないし三にわけられるものが多いようである。中には湖南省叶県旧県M一^⑩、河南省正陽蘇莊M一^⑪などのように、四つや五つの廂に区切られたものもある。対称式槨は棺廂を中心に、前後左右、あるいは旋回状に廂を配列したもので、槨の構造がさらに複雑になっている。湖北省鄂城M五三^⑫は棺廂を中心にしてその前後と左右に副葬品専用の廂が対称的に置かれている。一方、包山楚墓M二は棺廂を中心にまわりに四つの副葬品廂を旋回状に配置した例で、これを旋回対称式と呼ぶことにする(図四—3)。

- ① 河南省文物研究所等『浙川下寺春秋楚墓』文物出版社、一九九一年。
- ② 湖北荆州地区博物館『江陵天星觀一号楚墓』『考古學報』一九八二年一期。
- ③ 湖南省博物館『湖南湘鄉牛形山一、二号大型戰國木槨墓』『文物資料叢刊』三、一九八〇年。
- ④ 河南省文物研究所等『河南淮陽馬鞍塚楚墓發掘簡報』『文物』一九八四年一〇期。
- ⑤ 湖北省荆沙鐵路考古隊『包山楚墓』文物出版社、一九九一年。
- ⑥ 湖北省荆州地区博物館『江陵雨台山楚墓』文物出版社、一九八四年。
- ⑦ 湖北省宜昌地区博物館、北京大學考古系『當陽趙家湖楚墓』文物出版社、一九九二年。
- ⑧ 荆門市博物館『荆門十里碑廠一号楚墓』『江漢考古』一九八九年四期。
- ⑨ 湖北省宜昌地区博物館『當陽曹家崗五号楚墓』『考古學報』一九八八年四期。
- ⑩ 安徽省六安縣文管所『安徽六安縣城西廬廠二号楚墓』『考古』一九八五年二期。
- ⑪ 湖北省博物館『曾侯乙墓』文物出版社、一九八九年。
- ⑫ 潛江縣博物館『潛江龍灣小黃家台楚墓』『江漢考古』一九八八年四期。
- ⑬ 湖北省博物館『襄陽蔡坡戰國墓發掘報告』『江漢考古』一九八五年一期。

二 楚墓に於ける柳内開通の志向

楚墓の独自性をきわだたせているものとして、上述の墳丘や埋葬施設の構造の特徴とならんで、棺槨における窓や門扉

- ⑭ 表一の参考文献については以下のとおり：湖北省荆州地区博物館『江陵雨台山楚墓』文物出版社、一九八四年。湖北省文物考古研究所『江陵雨台山楚墓發掘簡報』『江漢考古』一九九〇年三期。湖北省博物館等『湖北江陵拍馬山楚墓發掘簡報』『考古』一九七三年三期。湖北省博物館『襄陽山灣東周墓發掘報告』『江漢考古』一九八三年二期。湖南省博物館『湖南益陽戰國兩漢墓』『考古學報』一九八一年四期。湖南省博物館『湖南資興旧市戰國墓』『考古學報』一九八三年一期。湘西土家族苗族自治州文物工作隊『湘西保靖四方城戰國墓』『湖南考古輯刊』第三集、一九八六年。
- ⑮ 「九歌解題」『楚辭學論文集』上海古籍出版社、一九八四年。
- ⑯ 前掲『漢墓の姿容——柳から室へ』『史林』第七七卷第五号。
- ⑰ 湖南省文物考古研究所『臨澧太山廟楚墓』『湖南文物』三、一九八八年一月。
- ⑱ 信陽地区文管會等『河南光山春秋黃季佗父墓發掘簡報』『考古』一九八九年一期。
- ⑲ 河南省文物研究所『河南省叶県旧県一号墓の清理』『華夏考古』一九八八年三期。
- ⑳ 正陽縣文化局等『河南正陽縣莊楚墓發掘報告』『華夏考古』一九八八年二期。
- ㉑ 鄂城縣博物館等『湖北鄂城鄂銅五十三号墓發掘簡報』『考古』一九八八年四期。

の造形があり、これはとくに楚墓槨の複雑化とも関連しており、極めて重要な要素といえる。

1 模造門扉の創出

〔方孔〕 箱型槨や間仕切型槨の仕切板にあげられる小さい方形の孔。「曾侯乙」墓^①の箱型連結複合式槨では槨内隔壁の下側に中央の槨と周辺の槨とをつなぐ方孔がある(図四—4)。すなわち三つの隔壁の下側に高さ三五×幅四〇センチ、高さ五五×幅四四センチ、高さ六〇×幅四七センチの三つの方孔が一つずつ開いている。隔壁の高さがそれぞれ三・三、三・四、三・五メートルであるのに比べ、方孔は小さく目立たない存在である。一方、この複雑な複合式の箱型槨である「曾侯乙」墓の東槨には、本人専用の高さ二・一メートルの銅芯木造箱型槨があり、その箱型槨の足側壁下部にも高さ三四×幅二五センチの方孔が開けられている(図八—1)。

この種の方孔は大型墓だけではなく、一般の間仕切型中型墓にも見られる。江陵雨台山楚墓^②M三二一、M四〇六は槨内に一枚の仕切板を入れることによって棺廂と頭廂が設けられているが、仕切板の中央下側に一つの方孔を開けている。また雨台山M一六六は三つの埋蔵空間に区切られた中型槨墓であるが、その仕切板にも方孔がある(図五—1)。この方孔は、被葬者の眠る空間と副葬品の空間をつなぐものであり、これによって槨の中に一つの回遊ルートが出来上がっているのである。

〔模倣窓・門〕 槨の仕切板あるいは棺の外面に浮き彫りや絵画などの手法で建物の窓や門扉を表現したものの。今のところ、その最古の調査例はやはり「曾侯乙」墓である。「曾侯乙」の大型漆棺やその殉死者の漆棺には窓と扉の描写が明瞭で、他の楚墓にも見られるのと同様に棺槨における漆絵画の重要なモチーフとして描かれている。その丁寧な表現手法から見れば、単なる棺の装飾文様というよりも、死者に対して何らかの機能的な役割を果たしていると思われる。前述した銅芯木造箱型槨の足側に開けられた方孔と、その槨内に置かれた棺の表面に描かれている窓と門扉とは、決して無関係で

楚墓から漢墓へ（黄）

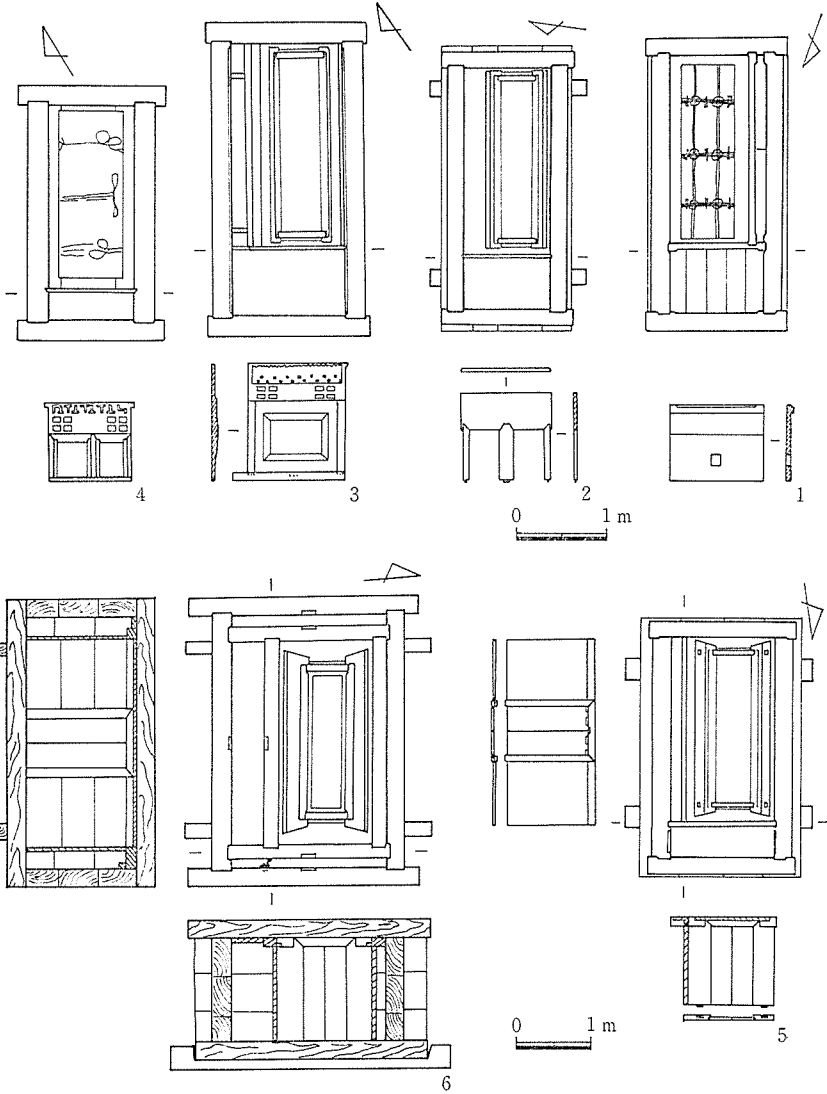


図5 楚墓室内における模造門扉の形成

1. 方孔：湖北省江陵雨台山M166 2. 模倣窓・門：湖北省荆州磚瓦廠M2 3. 模倣窓・門：湖北省江陵溪磯山M2 4. 模倣窓・門：同江陵溪磯山楚墓M16 5. 模造門扉：同江陵雨台山M554 6. 模造門扉：湖南省長沙市荷花池M1

はない。これらは互いに呼応して設けられたもので、永遠の眠りについている被葬者のために槨内の回遊ルートを形成すべく、工夫して用意されたものに違いない。戦国中期の楚王墓と推定される江陵天星觀M一では、七つに区切られた槨内の東、西、南側の仕切板に門扉の絵が描かれ、被葬者の眠る空間と三方の副葬品廂とが象徴的につながれているのである。

一方、湖北省荊州磚瓦廠M二^③は、頭廂の仕切板には大きな方孔が二つ並び、まるで門のように開けられている(図五二)。また同江陵溪峨山楚墓M二^④の頭廂の仕切板ではこの種の模倣窓・門がやや複雑な造形として現れている。その仕切板の彫刻は上下に分けられ、上部には透かし彫りの小方孔四つを一組にした模倣窓が左右二組あるのに対して、下部には浮き彫りの手法で一枚の開けられない扉を表現している(図五三)。そして江陵溪峨山楚墓M一六^⑤の槨にも同じ手法ではあるが、さらに写実的な工夫を凝らした窓と門扉の造形がある(図五四)。これらの模倣窓・門は、すべて棺廂側を裏、頭廂側を表としている。

〔模造門扉〕 槨の仕切板に門、楣、扉板、扉軸穴などの門構えが、写実的に作りだされた実際に開閉可能なミニチュアの門扉。この模造門扉には片開扉と両開扉の二種類があるが、やはり棺廂側を裏、外側の副葬品廂を表としている。具体例をあげると、江陵李家台M四^⑥では頭廂と側廂の仕切板の中央に高さ七〇・五、幅四三・五センチの片開扉が一つずつあり、扉の表面には浮き彫りで門扉のデザインがより写実的に表現されている。これに対して、二枚の扉を用いた観音開きの造形を両開扉と呼ぶことにする。兩台山M五五四は三つに区切られた槨の頭廂と側廂の仕切板に、それぞれ高さ一〇一、幅六三〜六八センチの両開扉が一つずつある(図五一五)。

2 槨内開通の動き

本来、槨墓の性質としては、埋葬空間の密閉性と隔絶性が志向される。ところが、戦国期楚墓の槨は、棺や槨内の仕切

板に模倣窓・門や模造門扉を備え、密閉された槨内の各々の空間を開通させるような傾向が強くなる。それは槨の本来的な性質と矛盾するもので、楚の槨墓にしか見られない独創的なものである。こうした点を考慮して、次に埋葬施設における槨内開通の出現から発展の過程を整理してみる。

戦国時代前期――

現在までに判明している調査資料からみると、密閉した埋葬施設に方孔のような槨内通路を開ける最古の例は、戦国前期の「曾侯乙」墓である（前掲図四―4、図八一―1）。それと同時に、「曾侯乙」本人の大棺の側板外面に、漆絵画で模倣窓・門が、槨内の方孔と対応する形で表現されている。この方孔という装置は、槨構造のもつ遮断と隔絶という特性を変質させていく端緒として注意されるのであるが、小さく、方向も決まっていないことから、それは槨内における被葬者の靈魂の回遊できる通路として出現したのではないかと考えられる。例にあげた「曾侯乙」墓の方孔、模倣窓・門の造形はすでに成熟した形と見られるので、より先行する形態の存在が予測でき、その出現はすくなくとも春秋後期に遡ると思われる。

戦国時代中期――

兩台山墓地の中型槨墓M一六六にも高さ一三、幅一〇センチの方孔があり、前例より小さいが、槨自体の大きさや仕切板の高さとの比率および表現手法などは、「曾侯乙」墓とほとんど変わらない。またこの時期には、槨内の仕切板に彫刻手法を用いた模倣窓・門の表現が登場してくる。それは、湖北省荆州磚瓦廠M二などの例からすると、方孔の拡大したものと見られ、したがって、槨内の回遊通路を作るといふ意識がより明確になったと推測できる。

それをさらに強調するようなかたちで模造門扉が誕生するのである。江陵太暉觀M五〇^①を代表とする模造門扉は初期段階の代表例で、その例のように槨内の頭廂仕切板に設けるのが多いようである（図八一―5）。その後やがて、長沙市留芳嶺M三^②のように側廂仕切板にも設けられるようになり（図八一―7）、両開扉の枠組が多くなる。こうして模造門扉の確立につ

れて方孔の造形は自然に消えてゆき、模倣窓・門の表現も減少していった。

戦国時代後期——

江陵秦家嘴M二^⑩、湖南省長沙市広濟橋M五などのように、模造門扉、特に両開扉が一層多様化、複雑化する傾向を見せ、定式化した。閭仕切型旋回対称式槨とした湖北省黃岡県黃州国児冲M一^⑪では、槨内に両開扉が対称的に配置されている。その最も複雑なタイプとしては湖南省長沙市荷花池M一^⑫があげられる。それは閭仕切型対称式槨で、棺甕を取り囲む四枚の仕切板に一枚ずつの模造門扉がしつらえてある。この四面の両開扉は高さ一一四、幅六〇〜七五センチで、それぞれ東西南北に向かって対称的に設けられている。そのうち北側扉は、空間が狭すぎるといへば何れも埋蔵されておらず、ただ空いているだけである。にもかかわらず、その模造両開扉は少しも手抜きされず技巧が凝らされている(図五—六)。

上述した時間的な変遷をまとめたものが図八の1〜7である。方孔から模倣窓・門、さらに模造門扉へといたる過程を見ると、それらの設置場所や象徴性といった基本的な部分での一貫性が指摘できる。したがってこの槨内開通という構造は、楚墓において独自の発展過程を辿ったもので戦国後期に定着したと言える^⑬。

筆者の調査資料によると江陵地域の楚墓では模造門扉の近くから実物大の靴や杖などがみつかる例が少なくない。しかし、その両開扉の高さは平均六〇センチで、最大でも一〇〇センチ前後におさまり、いくら実用品を真似て作ったとは言え、扉の実用性は欠如し、デフォルメされたものであるから、あくまで象徴的な性格しか認められない。模造門扉はすべて棺甕を裏側に、その外周の頭甕、側甕のほうを表側とされるが、それらの配置の方向は必ずしも一定していない。以上のことから、楚墓における模造門扉の形成と確立はあくまでも、被葬者の靈魂の槨内での回遊という枠内で理解しなければならぬ。それでもしだいに槨内の各甕を具体的に家屋内の空間に対応させて死者の世界をイメージするようにいった。模造門扉や窓が、被葬者の死後の住空間に対する高度な象徴化作用によって、実用性を欠きながらも、写実的で入念な作りとなって発達していくのである。

- ① 前掲『昏侯乙墓』文物出版社、一九八九年。
- ② 前掲『江陵雨台山楚墓』文物出版社、一九八四年。
- ③ 荆州地区博物館「湖北荆州磚瓦廠二号楚墓」『江漢考古』一九八四年一期。
- ④ 湖北省博物館江陵工作隊「江陵漢嶽山楚墓」『考古』一九八四年六期。
- ⑤ 江陵県博物館「江陵漢嶽山楚墓」『江漢考古』一九九二年四期。
- ⑥ 荆州博物館「江陵李家台楚墓清理簡報」『江漢考古』一九八五年三期。
- ⑦ 湖北省博物館等「湖北江陵太暉鎮五〇号楚墓」『考古』一九七七年一期。
- ⑧ 長沙市文物工作隊「長沙留芳嶺戰國墓發掘簡報」『湖南文物』第一輯、一九八六年。
- ⑨ 荆沙鐵路考古隊「江陵秦家嘴楚墓發掘簡報」『江漢考古』一九八八年二期。
- ⑩ 湖南省文物管理委員會「長沙市広濟橋第五号戰国木槨墓清理簡報」

三 長江中流域における楚墓から漢墓への転換

かつて地域文化の発展と繁栄を謳歌していた楚国は、秦王朝の巨大な軍事勢力と文化進出の前に屈し、漢帝国時代に入ってから、統一国家の南方重鎮として再編成された。漢代の郡・国の設定によって、楚の都が置かれていた湖北省江陵地域は「南郡」にかわり、湖南省長沙地域周辺には「長沙国」が設置された。こうした秦・漢王朝の交替や帝国統一の新政策、地域の再編成などによって楚文化の様相は大きく変わっていくのである。

漢文化の中心である中原地域においては、前漢中期頃に柳墓から室墓への転換が大幅に進められ、中小型漢墓もその動

- ⑪ 文物参考資料』一九五七年二期。
- ⑫ 黄州古墓發掘隊「湖北黄州国兪冲楚墓發掘簡報」『江漢考古』一九八三年三期。
- ⑬ 長沙市文物工作隊「長沙市荷花池一号戰国木槨墓發掘報告」『湖南考古輯刊』五、一九八九年。
- ⑭ これらの模造門扉の高さと幅の比率はほぼ一対一・五あたりにおさまり、建築数学の黄金分割法に近い数値となっている。
- ⑮ 現在のところ、楚以外の地域では春秋戰国期の墓に模造門扉の存在を確認できる例はほとんど見あたらない。陝西省鳳翔県で調査した春秋中、後期頃の秦公一号大墓には大型箱型槨の主、副槨の間に方孔か小門らしいものがあるが、盜掘で破壊されたため、その構造について知ることができない（秦都雍城考古發掘研究總述）『考古与文物』一九八八年五、六期）と記されている。ここにあったとしても、ほかの春秋戰国期の秦墓には模造門扉が存在せず、例外的なものと考えてよいであろう。

きと連動して、洛陽地域では空心磚墓、西安ではアーチ頂磚室墓が出現する。そして前漢後期頃に前堂後室を中心とする中軸線配置型室墓が定着し、それが全域へ拡がっていった^①。前章でまとめた楚墓が、漢の文化体系のなかにいかに受け継がれ、融合していくのか。また逆に漢墓の槨から室への転換が戦国期の楚の墓制にどのような影響を与えたのか。この問題について、とくに楚墓の特徴であった槨内開通の動きに注目しながら以下で検討してみたい。

1 戦国期楚墓の特色の喪失と継承

この十年来、江陵地域において開発に伴う漢墓の調査が盛んに行われている。未発表の資料が多いが、はっきり言えるのは、戦国期に楚といわれた地域では、漢代に入ると、紀南城周辺の楚墓のような大、中、小型墓の規律的な配列は目立たなくなり、比較的小単位で集中性のある墓地を作るようになったことである。これは漢帝国による地域の再編成が及んだ結果と考えられる。楚墓の墓壇の段築構造は前漢前期にも引き継がれ、「長沙国」周辺の大、中型槨墓にはその伝統がしばしば見うけられる。たとえば長沙市馬王堆M一、M三には、段数は減少しているものの、二～五段の段築がまだ残っている^②。だが、前漢中期以降には、この段築が徐々に消失していく。

埋葬頭位は、同地の春秋戦国期における南向、東向を主とした楚墓とは対照的に、湖北省雲夢睡虎地秦墓、漢墓においては北向がほぼ半数を占めており、大きな変化が見られる^③。湖南省長沙地域の七二基の漢墓でも、中原の伝統的な特徴である北枕の比率が増加している^④。一方、円弧形槨や上げ底槨はすでになくなり、ほとんどが平底の箱形槨に変わった。これに応じるかのように、苓床も見られなくなる。かつて根強く存在した楚的風習はここに解消されたのである。

2 槨護型槨墓と玄門の成立

前節の楚的要素の消失に対して、戦国期楚墓に見られた槨構造の複雑化や模造門扉の普及は、漢代に入って飛躍的に展

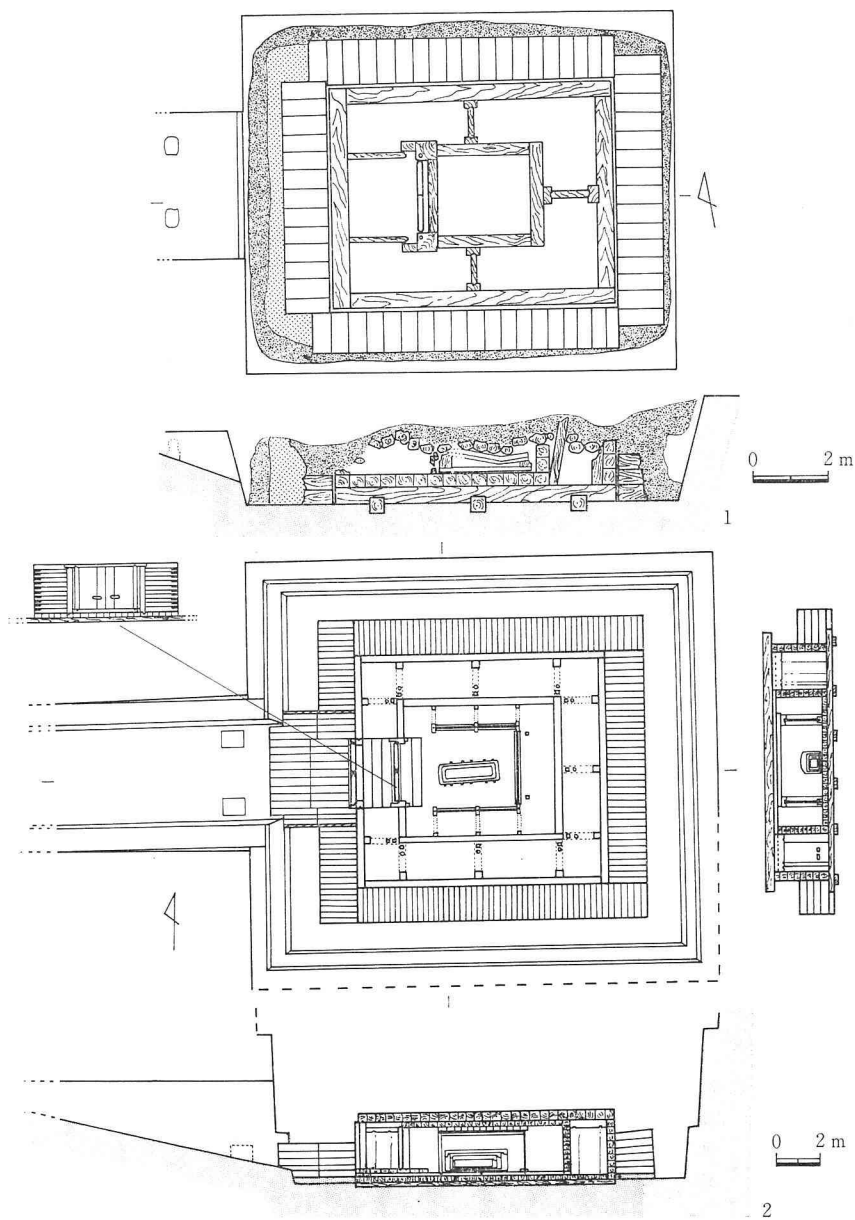


図6 前漢期の檟護型柩墓

1. 檟護型間仕切式柩：湖南省長沙市曹孺墓 2. 同檟護型回廊式：長沙市象鼻嘴M1

開する。秦末および前漢初頭の中小型墓は、湖北省雲夢木匠墳秦墓M一や江陵高台M一八、同宜城楚皇城秦漢墓のような箱型柳がやはり一般的で、雲夢鼎龍岡秦墓M六^⑤、雲夢睡虎地M一^⑥、長沙漢墓M三四一^⑦、同長沙揚家灣M六^⑧のような間仕切型柳、そしてさらに最も複雑なタイプとして柳護型柳墓もあらわれてくる。それは、戦国期楚墓に特有の間仕切型柳墓をもとに発展した大型柳墓で、一定規格の角材を従来の柳墓の外周に積み上げて厚い壁を築き、「題湊」と呼ばれる柳壁をそなえたものである。^⑨

この柳護型柳墓はほぼ大型墓に限られるのが特徴的で、それについては、拙論「漢墓の変容——柳から室へ」『史林』七七卷五号)に詳しく述べている。ここで長沙市象鼻嘴M一^⑩を代表とする柳護型回廊式柳墓の出現過程を強調したい。それは柳内各廂を区切るあらゆる仕切板に門扉がとりつけられ、柳内に回廊施設が形成される点で、楚墓の柳内開通の志向を實踐したものと言える(図六一^⑪)。この動きに加え、さらに墓道方向の柳壁には内外二重の門扉が設置される。両開扉は高さ二・一、幅二・四メートルで、従来の実用性のない模造門扉と異なり、玄門と呼ぶべきものに転換している。柳構造の革新につれ、傾斜墓道と墓壙底部の落差の消滅、また墓道底部から玄門までの水平通路の整備も進められ、この水平通路の左右両側に長さ三・二、高さ一・二メートルの板が立てられ、まさしく横穴系室墓の羨道の祖形と言えるものとなっている。^⑫ここで玄門の実用性が明らかになり、柳内の回廊でも通常人間の自由に通れる大きさになっている。従って、死者の棺が、柳の構築が終わったあと横から入れられた可能性が高い。とはいえ、該当柳墓の場合、棺廂のまわりに仕切板で区切った副葬品廂がまだ残っており、依然として各廂ごとに蓋を閉める仕組みが採用されていることから、柳から室への転換期の要素の強い柳墓と言えるのである。

このようにして、柳内と柳外とが全面に開通し、初めて生と死の世界を一直線に結び付ける形態が完成したのである。象鼻嘴M一に見られるこの柳外開通の動きは、時期的に遡る柳護型回廊式柳墓である長沙曹嬭墓^⑬にその萌芽を見いだすことができる(図六一)。曹嬭墓では、中央部の棺廂と五つの側廂が一ヶ所を除きまだ完全な密封状態を呈している。

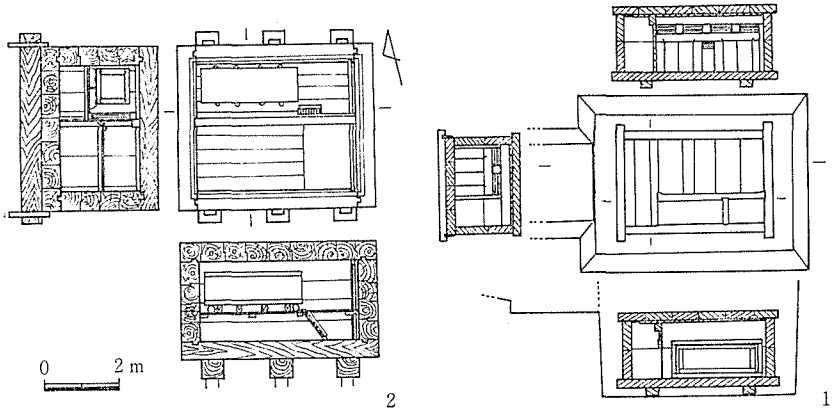


図7 前漢期の間仕切型槨墓

1. 非対称式：湖北省江陵鳳凰山M168 2. 上下分層式：湖北省光化县M3

ただし、棺廂と頭廂の間にだけ、すなわち墓道方向にのみ、高さ一・四、幅一メートルの両開扉が設けられており、これは戦国期のものに比べればすでに大型化している（図八―12）。また門扉の前の頭廂では、果物を入れた漆案や漆盤などが数点検出されており、副葬品納入スペースというよりは、祭祀空間としての性格を備え始めていることをうかがわせるのである。しかし、この墓道と墓壙底部の落差はいまだ、〇・六メートルもあり、柳壁には門扉を設けていない。さらに柳の外周には「題湊」壁が積まれ、柳の全体を大量の炭と白膏泥で包み込んでいるのだから、ここでは棺を横から入る仕組みがまだできていないのである。

3 中小型漢墓に見られる柳構造の多様化と門扉施設の普及

前項で述べた大型墓における動きは、やや遅れたかたちで中小型墓にも認められる。

前漢期において中原地域で盛んに作られた磚室墓、空心柳墓に対して、この地域の中小型墓では相変わらず柳墓が主である。しかし、その中でも興味深いのは柳構造の多様化であり、限られた柳内の埋葬空間をより一層拡大するため江陵鳳凰山M一六八^⑩（図七―1）のような従来型の垂直方向の仕切り方に加えて、あらたに上下に分層する柳の登場を見ることである。この種の柳構造はさらに光化县漢墓M三^⑪を代表とする同空間の上下分層式

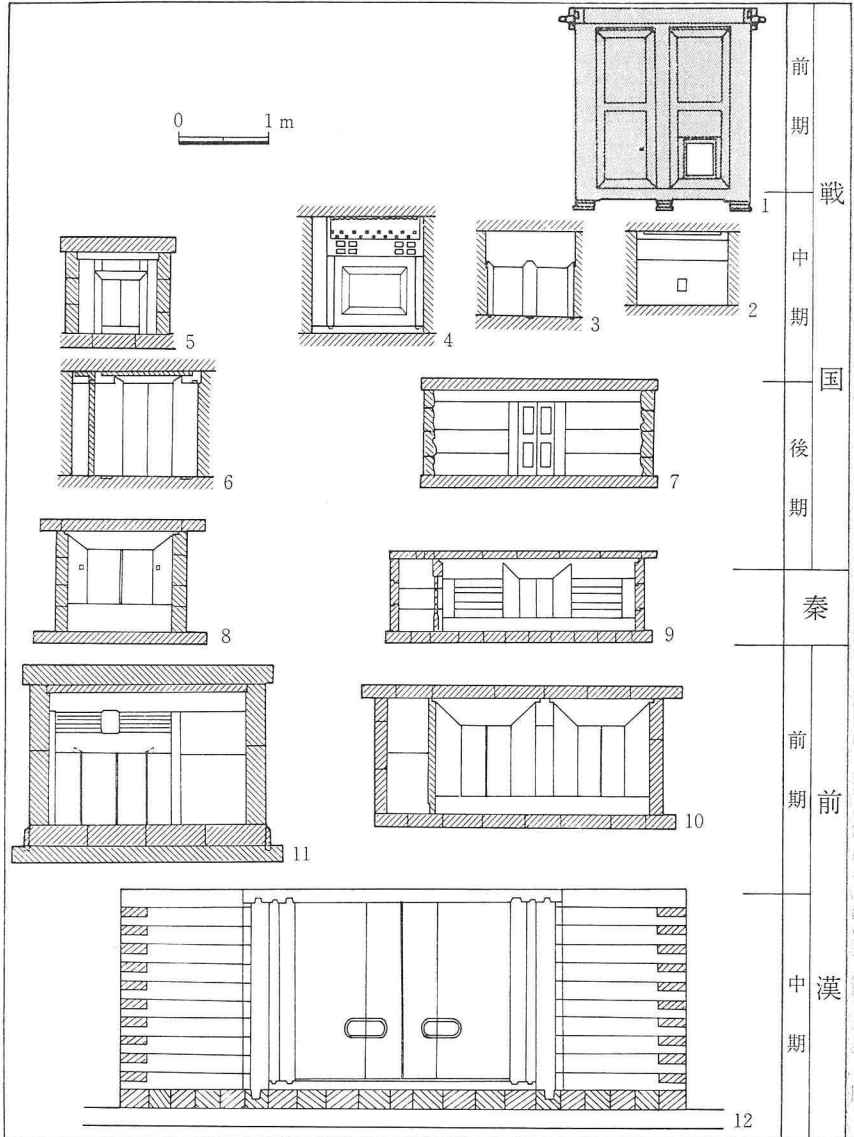


図8 栊内開通の推移

1. 湖北省隨縣「曾侯乙」墓 2. 同江陵景雨台山M166 3. 同荊州磚瓦廠M2
 4. 同江陵景溪峨山M2 5. 同江陵景太暉觀M50 6. 同江陵景雨台山M554
 7. 湖南省長沙市留芳嶺 8. 湖北省雲夢縣睡虎地M7 9. 同雲夢縣睡虎地秦漢墓M39
 10. 同雲夢縣M47 11. 同江陵景鳳凰山M168 12. 湖南省長沙市象鼻嘴M1

と、長沙漢墓M二〇三^⑧のように、被葬者の埋葬空間とその下側の地下収蔵庫らしい埋蔵空間を別々に作る階段状の上下分層式に分けられる。

光化県漢墓M三は、上下分層式槨の最も保存の良い例で（図七―二）、太い角材で組み立てた槨は長さ五・一、幅四・二、高さ三メートルである。上層北側に被葬者の棺が置かれており、幅〇・二四メートルの模造門扉の付く仕切板がある。下層には青銅器、漆器、木俑、車馬具及び生活用具などが入れられ、この上下層をつなぐミニチュアの梯子まで用意されている。一方、東榔壁寄りに、高さ一・九五、幅一・六メートルの大型両開扉が設けられている。ただし、その外側は完全に密閉された極めて狭い空間であることから、これも実用性はない。この新形式は墓というより、まるで一つの住宅空間を表しているかのようである。

こうした槨の複雑化の一方で、中小型墓においては模造門扉の普及が楚墓の系譜を受け継いだ形で進められていった。雲夢県睡虎地秦墓では、頭廂、側廂の仕切板に高さ約五〇、幅五〇センチの模造両開扉が多数認められ（図八―三）、雲夢県睡虎地M四七のように、一枚仕切板に二組の模造両開扉を並べる例も少なくない（図八―十）。また江陵県揚家山秦墓M一三五^⑨の模造両開扉には銅製のミニチュアの鋪首が飾られている。

漢墓におけるこれらの模造門扉は、図八―八、九、十に示したようにさまざまな形があるが、また門扉と窓の組み合わせが特徴的である。例えば睡虎地M三九^⑩は、頭廂と側廂の仕切板に両開扉があり、側廂の模造門扉は両開扉を中心にその両側に透かし彫りの窓を備えた、いわゆる「中扉側窓」になっている（図八―九）。これに対し江陵鳳凰山M一六八（紀元前一六七年）、江陵「安陸守丞館」墓M八（紀元前一六四年前後）^⑪などには、窓を両開扉の上部に設けた「上窓下扉」のタイプがある（図八―十一）。

前漢期においては該地域の中小型槨墓の模造門扉は、多様化、複雑化を見せながらも、依然として槨内の仕切板に多方向に設置され、ほとんど最高一メートル前後におさまる。つまり、いまだに実用性が欠如しているのであるが、これらは

その製作手法や所在位置などからして、いずれも楚に承譜を辿ることができるとある。

- ① 中国社会科学院考古研究所「洛陽燒溝漢墓」科学出版社、一九五九年。前掲「漢墓の変容——鞞から室へ」『史林』第七七卷第五号。
- ② 湖南省博物館、中国科学考古研究所「長沙馬王堆一号漢墓」文物出版社、一九七三年。湖南省博物館「長沙馬王堆二、三号漢墓發掘簡報」『文物』一九七四年七期。
- ③ 湖北省博物館「一九七八年雲夢秦漢墓發掘報告」の付表「一九七八年雲夢秦漢墓登記表」『考古學報』一九八六年四期。
- ④ 長沙市文物工作隊「長沙西郊桐梓坡漢墓」の付表、『考古學報』一九八六年一期。
- ⑤ 雲夢鼎博物館「湖北雲夢木匠墳秦漢墓簡報」『江漢考古』一九八七年四期。
- ⑥ 湖北省荊州地区博物館「江陵高台一八号墓發掘簡報」『文物』一九九三年八期。
- ⑦ 楚皇城考古發掘隊「湖北宜城楚皇城戰國秦漢墓」『考古』一九八〇年二期。
- ⑧ 湖北省文物考古研究所「雲夢龍崗秦漢墓地第一次發掘簡報」『江漢考古』一九九〇年三期。
- ⑨ 雲夢睡虎地秦墓編寫組「雲夢睡虎地秦墓」文物出版社、一九八一年。
- ⑩ 中国科学院考古研究所編「長沙發掘報告」科学出版社、一九五七年。
- ⑪ 湖南省文管會「長沙揚家灣M〇〇六号墓清理簡報」『文物參考資料』一九五四年二期。湖南省文管會「長沙出土的三座大型木槨墓」『考古學報』一九五七年一期。
- ⑫ 「題湊」とは、文獻用語である。『呂氏春秋』に「題湊」の記載があり、高誘の註によって「題湊、複疊也」と説明されている。そして『吳越春秋』に吳王の娘が亡くなった時、「鑿池積土、文石為槨、題湊為中」と記す。また『札記』「檀弓篇」を注釈した鄭玄が「題湊」について「以端題湊也、其方蓋一尺」とある。それによって、「題湊」という用語の出現は、早くとも戦国期にすでに出現したのがわかるが、その構造の実体ははっきりせず、解釈通り実在するかどうか検証できる資料がない。角材の小口を揃えて一部の榫壁を作ったものは、陝西省鳳翔県の秦公一号墓の東西榫壁に似たようなものを認める研究者がいるが、その仕組みがはっきりしないので、明確に指摘することができない。今見てきたように楚墓の槨が複雑化する変遷過程を見ると、標型槨墓は、前漢期に入ってから定式化したものであると言えよう。
- ⑬ 湖南省博物館「長沙象鼻嘴一号西漢墓」『考古學報』一九八一年一期。
- ⑭ 回廊内の仕切板に開けられた片開扉は、古代建築の「戸」にあたる。
- ⑮ 長沙市文化局「長沙咸家湖西漢曹孃墓」『文物』一九七九年三期。
- ⑯ 湖北省文物考古研究所「江陵鳳凰山一六八号漢墓」『考古學報』一九九三年四期。
- ⑰ 湖北省博物館「光化五座墳西漢墓」『考古學報』一九七六年二期。
- ⑱ 前掲「長沙發掘報告」科学出版社、一九五七年。
- ⑲ 湖北省荊州地区博物館「江陵鼎揚家山一三五号秦漢墓發掘簡報」『文物』一九九三年八期。
- ⑳ 雲夢鼎文物工作隊「湖北雲夢睡虎地秦漢墓發掘簡報」『考古』一九八一年一期。
- ㉑ 長江流域第二期考古工作人員訓練班「湖北江陵鳳凰山西漢墓發掘簡報」『文物』一九七四年六期。

四 柳外開通の伝播と磚・石室墓の導入

前章に述べたように楚的な様相をもつ柳内開通から柳外開通への動き、具体的に言うとな漢代における模造門扉や玄門施設の成立は楚文化の栄えた地域をはるかに越えて見られるようになる。

1 模造門扉の流行と玄門の確立

まず、大型漢墓における柳内開通の動向を見よう。前漢前期後半頃の西安市新安磚廠漢墓は、長さ九・九メートル、幅七・二メートルの大型間仕切型柳墓である（図九一）。墓道側に向かって高さ〇・六と〇・七メートルの内外二重の模造門扉がある。内側門構えの両側には棺廂左右の側廂をつなぐ門が開けてある。すなわち柳内開通と柳外開通が同時に進行している。しかし、大きな柳構造のわりに、その開通志向はまだ模造門扉の段階にとどまり、おそらく、前漢前期の都城における大型柳墓では、象鼻嘴M一のような実用門扉がまだ登場せず、横入口の仕組みは成立していないだろうと思われる。前漢中、後期の広陵王墓と推定されている江蘇省高郵県神居山M一は、象鼻嘴M一の発展形態で、南北長一六・七、東西幅一四・三メートルを計る。南北両側に二本の傾斜墓道があり、それに面して前後の二つの玄門が設けられる。その両玄門の間に回廊、棺室をつなぐ三つの両開扉があり、回廊内の各小廂にも片開扉が設置してある。そして、象鼻嘴M一に見られた棺廂前の祭祀空間はここで棺廂の約三分の一を占める大きさに増大し、また南側玄門の前側に羨道施設が整っている。こうして横から入る仕組みができ上がり、横穴系室墓の構造が完成した。これよりさらに成熟したものが北京大葆台漢墓である。^④

次に、こうした大型墓以外の中、小型漢墓の構造上の変遷を見てみよう。前漢前期から後漢前期にかけて柳墓が多数営まれた広東省広州漢墓^⑤では模造門扉が多く認められる。前漢前期の上下二層式のM一―三四は、柳内中心部の棺廂の四面

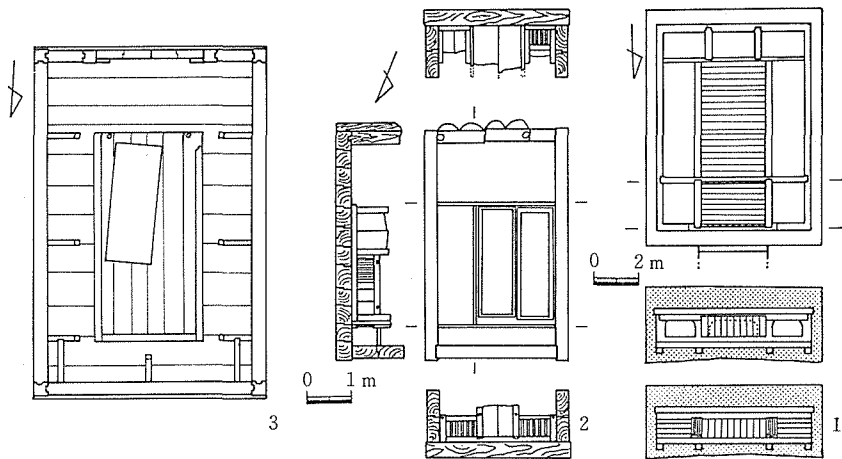


図9 他地域に見られた槨外開通の門扉施設

1. 陝西省新安磚廠漢墓 2. 江蘇省邗江姚莊M101 3. 江蘇揚州市「妾莫書」墓

の仕切板に四つの模造門扉がある。南側と北側の仕切板には高さ〇・八、幅〇・三メートルの両開扉があり、東側と西側の仕切板には高さ〇・七、幅〇・六メートルの門となっている。ここでも上下層に分かれる側廂壁にはミニチュアの梯子が置いてある。また、M二〇六〇^④は前漢中期以後の南方地域における上下分層槨墓の典型例である。下層の副葬品廂に模造両開扉があり、棺廂南側に高さ一、幅〇・八メートルの両開扉、そして頭廂側に高さ一・四、幅〇・六メートルの片開扉がそれぞれ検出されている。ここでは頭廂側の槨壁に門柱と封門板の組合せが確認でき、すなわち槨外開通をも志向していることがわかる。ただ、この槨壁に設けられた門扉の規格を見ると実用というには少し窮屈な感じがする。

江蘇省揚州地区で調査された前漢中期から後漢初頭にかけての槨墓にも模造門扉が見いだせる^⑤。前漢中期の江湖場M一は棺廂と頭廂、側廂の間にある二つの仕切板に「上窓下扉」の仕組みをもち、仕切板の隙間に浮き彫りで建築門闕、宮殿、玄関を表現している。そして、前漢後期の江蘇邗江姚莊M一〇一も槨内開通と槨外開通との両方の様相を示す好例である。それは頭廂、側廂、足廂の仕切板に三組の「中扉側窓」をもち、頭廂側の槨壁には両開扉が設けられて槨外へ開通するようになっている(図九一と)。前漢後期の揚州「妾莫書」墓も長さ七、

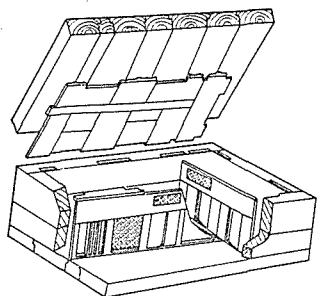


図10 安徽省天長県漢墓

幅四・五、高さ一・九五メートルの槨外開通の槨墓で、平面プランは槨護型回廊式槨の埋蔵空間と一致している。棺廂南側に両開扉があり、これと向き合う南槨壁にもう一重の大型両開扉が設けられている（図九一三）。

さらに、安徽省天長県の前漢後期の漢墓群（図一〇）や山東省文登県石羊村の前漢後期墓などにも、槨内仕切板に楚墓の系譜に由来する模造門扉を設けているのが確認されている。これらの墓例から前漢後期までに中小型槨墓でも槨内開通や玄門の確立によって槨外開通が完成していたことがわかる。

このように、まず大型槨墓において先行して進められた槨外開通は、模造門扉の玄門化への変質を伴って、長江中流域の楚文化地域においていち早く認められた。そして二重玄門の間あるいは旧棺廂前面の頭廂のところは棺の内外を結ぶ地点として重要視され、しだいにそこが祭祀空間として発達していく。この祭祀空間を増大させた結果、高郵神居山広陵王墓と北京大葆台漢墓に見られたように、祭祀空間と棺室が徐々に対照的に配置されるようになり、続いて祭祀空間の天井部の拡大といった埋葬施設の立体化が着実に進められる。最終的に中軸線配置型前堂後室墓が定着し、本格的な横穴系室墓の確立にいたったという変遷過程が明らかになってくるのである。

槨外開通については、祭祀空間の変化につながるような新たな祭祀の導入に伴って促されたものとみられるが、その導入を槨の内的発展とみるか、あるいは他の地域の影響を受けたものとみるかが次に問題となる。すでに見てきたように、前漢中期まで戦国期の楚墓的要素、つまりあくまで槨内開通に過ぎない模造門扉やミニチュアの槨外開通の仕組みが依然として根強く存在することは、後者の考えを支持するかのようである。しかしながら、埋葬施設における玄門の創出という点では、楚墓の伝統を無視することもできない。

この問題は、その後の漢墓がどのように浸透していくかを見ながら考えるのが適当であろう。

2 室墓の発達と普及

前漢期に広範圍に生じた槨から室への転換が、やがて祭祀前堂の発達を引き起こしたのは、前項で述べてきた通りである。それは長江中流域すなわち楚文化が栄えたこの地域においても例外でなく、まず角材で組み立てた室墓は、前漢後期の長沙王族「劉驕」墓^①が例として挙げられる。盗掘がひどいため、室内構造の詳細は不明だが、中軸線配置型の前堂後室墓であることがかろうじてわかる。ほぼ同時期の中小型墓も、中原地域に出現した磚室墓の影響を受け、角材や磚・切石で墓内の立体的空間を作り出す傾向が見られる。湖北省紀南城毛家園M五^②は、墓底や内部を区切る隔壁などは磚で作るが、墓の四壁はまだ角材で組み立てている。墓の頂部は依然として角材をかけた平頂となっている。槨墓の伝統を残しながらも、磚室墓の要素を部分的に取り込んだものとしてとらえられる^③。こうした方形に近い平面プランをとる構造が完全に磚室墓に変わったとき、中原地域より一步遅れてアーチ頂が導入される。この例として、前漢後期末の湖北省荆門市子陵崗M五三^④や後漢前期の荆門市玉皇閣漢墓^⑤が挙げられる。

前漢後期末、後漢初頭の湖北省襄陽市車架廠漢墓^⑥は、平面プランが槨護型回廊式槨墓の伝統を引く磚室墓であるが、これもアーチ頂の採用によって墓内の立体空間が拡大されている。特に前堂のアーチ頂が中央の双棺室や回廊のアーチ頂よりさらに一段高くなっていることに注目する必要がある(図一—一—一)。まさに祭祀空間の重視がそこに現れているのである。また、後漢中期の湖南省庸市R二七(図一—一—二)とSM一^⑦は、石積みと磚積みという違いはあるが、ともに高くて広い横長のアーチ頂前堂とその後方に並列する双棺室があり、中軸線配置型前堂後室墓に属するものである。この構造は回廊施設を省略したものであることは言うまでもなく、さらに簡略化した室構造としては資興M二〇四^⑧のような横長の前堂をもつ中軸線配置型磚室墓があり(図一—一—三)、その様相は中原地域の後漢期の磚室墓構造とよく合致する。

一方、雲南省子墩M一^⑨(図一—一—四)、同類痢墩M一^⑩、湖南省益陽羊舞嶺M一^⑪および長沙市五里牌M一^⑫に代表される耳室をもつ前堂後室墓が、比較的広範圍に認められる。それをさらに簡略化した形態と見られるものに同湘郷市牧羊村「陽

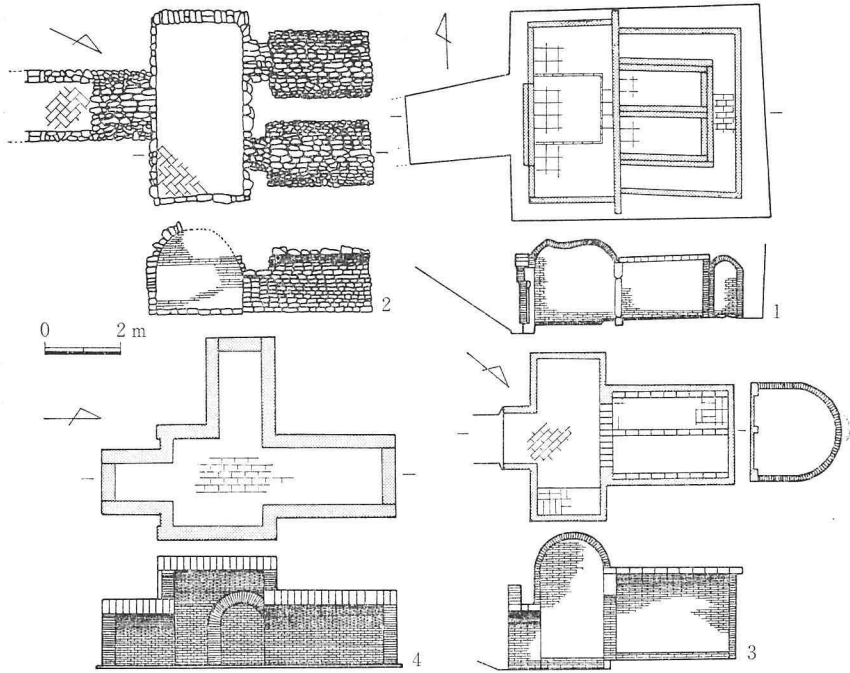


図11 長江中流域の漢代室墓

1. 回廊型双棺式室墓：湖北省襄陽市車架廠M3
 2. 中軸線配置型横長前堂後室墓：湖南省大甯R M27
 3. 同：湖南省資興県M204
 4. 中軸線配置型前堂後室墓：湖北省雲夢罩子教M1

嘉三年（一四三年）^②墓、長沙市五里牌東屯M一などのような中字形の前堂後室墓がある。最も単純な磚室墓としては、両袖式単室墓の湖南省資興M四九八、同彬州M六^③があり、資興漢墓には片袖式や無袖式と見られる単室墓も存在している。それらの磚室墓に圧倒的に多いのはアーチ頂構造であり、長沙市沙湖橋AM四一^④のように高くて広い穹隆頂前堂とアーチ頂後室を有するものが典型である。こうした磚・石室墓の場合、横入口の施設として、一旦は定式化した支門が、しだいに石扉や封門磚に置き換えられていく傾向がある。

以上のような動向から、長江中流域においては中原よりも遅れてアーチ頂の導入や前堂後室墓の発達が見られることがわかる。祭祀前堂の発達とともに柳構造の伝統が崩れていくことを考えると、柳外開通後の祭祀空間の発達は、楚の伝統とは異なった新たな祭祀の浸透を物語っていると言えるだろう。

そもそも、楚墓柳内における方孔や模倣窓・門が生みだされたのは、靈魂の自由な出入りのためであろうと考えられた。やがてそれが写実的な模造門扉の形成にともなうて柳内開通が成立していく中で、靈魂および昇仙の世界は限りなく生活空間として具象化されていくのであるが、このことは楚の地域のみならず特有の動きであった。その延長で、この地域の漢墓には、柳内開通の模造門扉が存在しながら、玄門の出現と確立によって柳外へも開通するようになった。そして、墓内における祭祀空間の整備とあいまって、死者の地下世界は初めて外の世界と触れ合う。それが、地上の人間によって新たな祭祀が地下にもちこまれる契機となり、祭祀堂の発達にみられるような中国墓制史上における変革を促す要因となったのであろう。

- ① 鄭洪春「陝西新安磚漢初積炭墓發掘報告」『考古与文物』一九九〇年四期。
- ② 中国社会科学院考古研究所『新中国的考古發現和研究』第四四五頁、文物出版社、一九八四年。文物編輯委員會『文物考古工作十年（一九七九～一九八九年）』第一〇九頁、文物出版社、一九九〇年。また揚州漢墓博物館で筆者が見出した資料による。
- ③ 中国社会科学院考古研究所『北京大葆台漢墓』文物出版社、一九八九年。
- ④ 広州市文物管理委员会、広州市博物館『広州漢墓』文物出版社、一九八一年。
- ⑤ 南京博物院、揚州市博物館「江蘇揚州七里甸漢代木槨墓」『考古』一九六二年八期。揚州市博物館「揚州東風磚瓦廠八、九号漢墓清理簡報」『考古』一九八二年三期。揚州博物館「揚州東風磚瓦廠漢代木槨群」『考古』一九八〇年五期。
- ⑥ 揚州博物館等「揚州邗江原胡場漢墓」『文物』一九八〇年三期。
- ⑦ 揚州博物館「江蘇邗江姚莊一〇一號漢墓」『文物』一九八八年二期。
- ⑧ 揚州市博物館「揚州西漢「姜吳書」木槨墓」『文物』一九八〇年二期。
- ⑨ 安徽省文物工作隊「安徽天長原漢墓的發掘報告」『考古』一九七九年四期。
- ⑩ 山東省文物管理处「山東文登原的漢木槨墓和漆器」『考古學報』一九五七年一期。
- ⑪ 前掲『長沙發掘報告』科学出版社、一九五七年。
- ⑫ 湖北省文物考古研究所「紀南城毛家園新莽東漢墓」『江漢考古』一九九四年四期。
- ⑬ 長江中流域の漢墓について調査資料が多いが、正式に公表されたものは少ない。筆者の現地調査によって、磚で墓の四壁を作り、頂部のみに角材で蓋をかける平頂のものが少なくないことが確かめられている。
- ⑭ 荆門市博物館「荆門市子陵崗古墓發掘簡報」『江漢考古』一九九〇年四期。
- ⑮ 荆門市博物館「荆門市玉皇閣東漢墓」『江漢考古』一九九〇年四期。
- ⑯ 襄陽市博物館「襄陽市車架廠古墓清理簡報」『江漢考古』一九九四年四期。

①⑦ 湖南省文物考古研究所「湖南大庸東漢磚室墓」『考古』一九九四年二期。

①⑧ 湖南省博物館「湖南資興東漢墓」『考古學報』一九八四年一期。

①⑨ 雲夢博物館「雲夢罾子墩一号墓清理簡報」『江漢考古』一九九〇年二期。

②⑩ 雲夢博物館「湖北雲夢癩痢墩一号墓清理簡報」『考古』一九八四年七期。

②⑪ 益陽地区文物工作隊「益陽羊舞嶺戰國東漢墓清理簡報」『湖南考古輯刊』二、一九八四年。

五 楚、漢墓の副葬品から見た地下世界

最後に、柳内開通から柳外開通、そして祭祀堂の発達と移っていく構造上の変化は、当時の社会におけるどのような埋葬理念の変化に由来したものか、以上の変化と副葬品組成に考察を加えながら、検討してみることになろう。

楚墓における副葬品については、ほぼ二通りにまとめられる。一つは、被葬者の生前の生活を反映するものである。そしてもう一つは、鎮墓獸や避邪、靈魂昇仙などの思想にかかわるものである。後者には、双鹿角器、桃枝偶人或鎮墓獸、木根彫「避邪」、怪獸鬼追凶や魂を導いて、天界へ昇進する龍鳳の舟の絵画^②などがある。これらは『漢書』『地理志』の「巫と鬼を信じ、淫祀を重んず」の記事を裏づけるものであり、鬼神崇拜・巫術信仰および靈魂昇仙思想が楚文化の特色として色濃く存在していたことがわかる。また出土した漆盤や皿、種実から知られる果物の供献の痕跡も、昇仙思想に関連するものであろう。

戦国時代における楚墓の副葬品の最も注目すべき変化と言えば、明器の出現と使用の増加である。春秋期の楚墓は、漸川下寺^③の楚の王室墓地の副葬品の組成に典型的にみられるように、青銅礼器、樂器、兵器を中心に、実用の車馬や殉死し

②② 長沙市文物工作隊「長沙市左家塘、五里牌東漢墓」『湖南省博物館文集』一九九一年。

②③ 湘潭市文物工作隊「湘鄉市近郊發現紀年東漢墓」『湖南文物』三、一九八八年。

②④ 湖南省郴州地区文物工作隊「湖南省郴州漢墓清理簡報」『考古』一九八五年八期。

②⑤ 李正光等「長沙沙湖橋一带古墓發掘報告」『考古學報』一九五七年四期。

た人間、馬、犬などが葬られているが、それらの埋納については何ら法則性が見えず、皆実物のままで墓に入れられる。こういうことは同時期の中原地域の埋葬風習に共通している。つまり支配階級の権力を誇示しているのである。それに対して、戦国前期の「曾侯乙」墓^⑥では、すでに一五四〇点の副葬品を用途別に櫛ごとに整然と埋蔵している。中櫛は列鼎、鬲等の青銅製礼器や編鐘、磬、琴等の楽器および酒器が主で、東櫛は「曾侯乙」の棺槨と殉死者の棺を中心に車輿、衣服、箆、兵器の一部が納めてある。北櫛は兵器、武具を主とした武器庫か防備施設であり、西櫛は殉死者のみである。この二つの例を比べると、青銅製礼器を中心にした大量しかも不規則の埋納から、現実生活の場を描くように変わっていく傾向が知られるのである。ただし、副葬品のほとんどや殉死の人間、犬などは依然として実物のままである。

戦国中期に入り、楚墓の副葬品はさらに豊富になり、礼器や供献物、飲食器、食糧、調度品など、現実生活用の品々がほとんど出揃い、陶製や木製明器の採用が普遍化する。とくに写実的表現手法をもつ俑の埋葬が多くなる。包山M二は、中央棺廂に被葬者の大棺や剣、玉などの身のまわりの品々だけを納め、旋回状を呈する個々の副葬品側廂は、用途別にはっきりと使い分けられている。東側廂は礼器と飲食器が主であり、南側廂は兵器、車馬具が多く、北側廂は日常生活用品や竹簡文書などを揃えてあり、西側廂は外出用の生活用品や折り畳みベッドなどを用意している。また陶器、木製楽器など副葬専用たる明器が少数ながら実用品と同時に採用され、手足、顔、鬚などを生き生きと表現した大きな木製の俑があり、初現期の写実的な形態を示している。副葬品の配置は遺策文の記載とも一致し、現実社会の生活場面をそのまま用意するような配慮が強く働いている。戦国後期の信陽楚墓^⑦でも、副葬品の器種組成は包山楚墓と一致し、生活陶器がすべて明器となり、また木製編鐘、木製編磬、二十一点の彩色木俑および木製鎮墓獸などの明器や木俑が増加し、実用品と併用して埋納するようになった。さらに前漢前期になると、同地域における漢墓の副葬品は、長沙市馬王堆M一のように、導引図や桃木小俑などのような楚文化系の遺物を残しながら、明器と実用品が拮抗して存在するようになる。

こうした明器の出現、普及、使用量の増加は、他地域でも確認されており、漢代になってさらに陶製明器の器種の中に

竈、井戸、倉の組み合わせが目立つようになる。それも現実の社会生活を地下世界に投影するようになったことを示すものといえよう。

- ① 邱東聯「鎮墓獸弁考」『江漢考古』一九九四年二期。劉敦願「試論戰國藝術品中的鳥蛇相闕題材」『湖南考古輯刊』一、一九八二年。
- ② 湖北省荊州地区博物館『江陵馬山一號墓』文物出版社、一九八五年。
- ③ 蕭兵「引魂之舟——楚帛画新解」『湖南考古輯刊』二、一九八四年。
- ④ 菲薛「馬王堆漢墓藝術品与巫文化」『湖南博物館文集』一九九一年。
- ⑤ 曾布川寛『崑崙山への昇仙——古代中国人が描いた死後の世界』中公新書、一九八一年。
- ⑥ 前掲『浙川下寺春秋楚墓』文物出版社、一九九一年。
- ⑦ 前掲『曾侯乙墓』文物出版社、一九八九年。
- ⑧ 前掲『包山楚墓』文物出版社、一九九一年。
- ⑨ 河南省文物研究所『信陽楚墓』文物出版社、一九八六年。
- ⑩ 前掲『長沙馬王堆一號漢墓』文物出版社、一九七三年。松崎つね子「戰國秦漢の墓葬に見る地下世界の変遷——馬王堆漢墓を手がかりに——」『古代文化』一九九三年五期。
- ⑪ 前掲『洛陽燒溝漢墓』科学出版社、一九五九年。前掲『広州漢墓』文物出版社、一九八一年。

おわりに

以上の検討によって模造門扉に代表される楚、漢墓の構造上の変容と副葬品組成の変化がよく対応していることが明らかになった。そして、それらはともに埋葬思想の変容に連動するものであった。この埋葬思想における変容は、おそらく楚が先行性をもっていたとはいえ、局地的現象にとどまらず、やがて全土に広まっていた。

一方、漢墓の変容において最も特徴的である埋蔵空間の立体化と墓内祭祀空間の発達、前漢中期に盛んになり、後漢前期には祭祀前堂と後棺室を中心とした漢墓構造の基本プランが定式化し、急激に全土へ波及していった。となれば、このような埋葬施設における新様相の確立および急激な全土的波及には何らかの背景を考える必要がある。その可能性の一つとして、儒教の存在、すなわち漢帝国の権力に裏打ちされた儒教イデオロギーの影響が直接に関わっていることが予測できる。儒教は生命論としての孝を基礎にした家族理論の上に政治理論が存立している。これに基づけば、祖先の祭祀を絶やさないことはすなわち、その一族が国家社会の中で安定した地位を得ることができる事を意味する。この儒教の礼

教性こそが、体制イデオロギーとして発展する一方で、家族単位における埋葬という私的行為の中にまで浸透していったのである。つまり、従来宗廟や社・壇などのような別域での天・地・祖先を祭る風習にかえて、祖先祭祀の儀式を墓室に持ち込むことになったと考えられる。現在のところ、祖霊信仰に関わる遺物は、木質の残りやすい楚の地域にある湖南省長沙市馬王堆M三、湖北省江陵鳳凰山M一〇、M一六八にみられる前漢前期の竹木簡文の「告地策」が最古のものであるが、後漢になると、朱書瓶、解注瓶などが大量に存在するようになること^③から、その風習が極めて盛んになったことがわかる。漢墓における埋蔵空間の立体化と祭祀前堂の発達、墓内で被葬者本人と祖先に対する祭祀儀礼を行うようになったことの反映であり、ここに漢帝国によって打ち出された国家統治の方策としての儒教支配の影響を読み取ることができるとはなからうか。

① 『論語』「学而篇」、「為政篇」。『禮記』「祭義篇」。侯外廬『中國思想通史』第二卷「兩漢思想」、人民出版社、一九五七年。加地伸行『儒教とは何か』中央公論社、一九九〇年。同『中國倫理学史研究——経学的基础的探究』研文出版、一九八三年。

② 黄盛璋「江陵高台漢墓新出告地策、遺策与相因制度發復」、『江漢考古』一九九四年二期。

③ 小南一郎「漢代の祖靈觀念」、『東方學報』京都第六十六冊、一九九四年三月。

図版出典

図一 郭沫若主編『中國史稿地圖集』(上冊)「春秋時期黃河長江中下游地区」地圖出版社(一九七九年)の改作。

図二 湖北省荆沙鐵路考古隊『包山楚墓』(一九九一年) 図二九・三一。

図三 1. 湖北省荊州地区博物館『江陵雨台山楚墓』(一九八四年) 図

四。2. 湖北省宜昌地区博物館、北京大學考古系『當陽趙家湖楚墓』(一九九二年) 図一〇。

図四 1. 安徽省六安縣文管所「安徽六安縣城西廬廟2号楚墓」『考古』一九九五年二期、図二・三。2. 潜江縣博物館「潜江龍灣小黃家台楚墓」『江漢考古』一九八八年四期、図四。3. 湖北省荆沙鐵路考古隊『包山楚墓』(一九九一年) 図三三の1・三五の1。4. 湖北省博物館『曾侯乙墓』(一九八九年) 図五・八。

図五 1. 前掲『江陵雨台山楚墓』(一九八四年) 図二の1、4。2. 荊州地区博物館「湖北荊州磚瓦廠2号楚墓」『江漢考古』一九八四年一期、図二・三。3. 湖北省博物館「江陵漢城山楚墓」『考古』一九八四年六期、図二・三。4. 江陵縣博物館「江陵漢城山楚墓」『江漢考古』一九九二年四期、図三・四。5. 同「江陵雨台山楚墓」(一九八四年)、図一七・一八・二〇。6. 長沙市文物工作隊「長沙市荷花池一號戰國木槨墓發掘報告」『湖南考古輯刊』五、(一九八九年)、図五・七・八。

図六 1.. 長沙市文化局「長沙威家湖西漢曹纓墓」『文物』一九七九年三期、図二。一九〇および『中国考古学会第一次年論文集』(一九八〇年) 俞偉超論文の図の3に加筆改作。2.. 湖南省博物館「長沙象鼻嘴一号西漢墓」『考古学報』一九八一年一期、図三・四・五・六に加筆改作。

図七 1.. 湖北省文物考古研究所「江陵鳳凰山一六八号漢墓」『考古学報』一九九三年四期、図二・三(右)。五に加筆改作。2.. 湖北省博物館「光化五座墳西漢墓」『考古学報』一九七六年二期、図四。

図八 1.. 前掲「曾侯乙墓」(一九八九年)、図。2.. 前掲「江陵兩台山楚墓」(一九八四年)、図二一の4。3.. 荆州地区博物館「湖北荆州磚瓦廠二号楚墓」『江漢考古』一九八四年一期、図三。4.. 湖北省博物館江陵工作队「江陵溪峨山楚墓」『考古』一九八四年六期、図三。5.. 湖北省博物館等「湖北江陵太暉觀五〇号楚墓」『考古』一九七七年一期、図二の1。6.. 同「江陵兩台山楚墓」の図一七。7..

長沙市文物工作队「長沙留芳嶺戰國墓發掘簡報」『湖南文物』第一期、(一九八六年)、図二。8.. 「雲夢睡虎地秦墓」(一九八一年)、図六。9.. 雲夢鼎山文物工作组「湖北夢睡虎地秦漢墓發掘簡報」『考古』一九八一年一期、図五のA。10.. 湖北省博物館「一九七八年雲夢秦漢墓發掘報告」『考古学報』一九八六年四期、図四の2。11..

湖北省文物考古研究所「江陵鳳凰山一六八号漢墓」『考古学報』一九九三年四期、図五。12.. 湖南省博物館「長沙象鼻嘴一号西漢墓」『考古学報』一九八一年一期、図六。

図九 1.. 鄭洪春「陝西新安磚廠漢初積炭墓發掘報告」『考古与文物』

一九九〇年四期、図六・七・八。2.. 江蘇邗江姚莊一〇一号漢墓」『文物』一九八八年二期、図三・四。3.. 揚州市博物館「揚州西漢「菱裏書」木槨墓」『文物』一九八〇年二期、図二。

図一〇 安徽省文物工作队「安徽天長皇漢墓的發掘報告」『考古』一九九四年四期、図二。

図一一 1.. 襄陽市博物館「襄陽市車架廠古墓清理簡報」『江漢考古』一九九四年四月、図二。2.. 湖南省文物考古研究所「湖南大府東漢磚室墓」『考古』一九九四年二期、図九。3.. 湖南省博物館「湖南資興東漢墓」『考古学報』一九八四年一期、図一五のA、B、C。4.. 雲夢博物館「雲夢單子墩一号墓清理簡報」『江漢考古』一九九〇年二期、付図。

〔謝辞〕 本論は京都大学大学院文学研究科博士後期課程一九九四年度の年間報告をもとにまとめたもので、小野山節、山中一郎両先生に御指導頂いた。高橋克壽氏には素稿段階で目を通していただき、さまざまの御教示を賜り、文章構成などに關してお手を煩わせた。また、森下章司、一瀬和夫、山本圭二、大賀克彦、魚津知克、中村潤子、向日市埋藏文化財センターの諸先生などから有益な御助言、御鞭撻を賜わっている。資料の実見にあたっては、湖南省博物館、湖北省博物館および同考古学研究所、荆州博物館、揚州漢墓博物館の多くの方々に御協力を得ており、そして、修士課程在学中に米山奨学金をいただき、特に西岡諄氏に色々御世話になった。末筆ながら、深謝の意を表します。

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

From Chu Period Tombs to Han Period Tombs: The Trend Towards More Open Tomb Structures

by

HUANG Xiaofen

The most important change in Chinese tomb structure between the Chu 楚 period and the Han 漢 period was the addition of a chamber of rites 祭祀堂. An important factor in this change was the opening of the tomb's interior.

This thesis uses typological study to examine both characteristics and changes in tomb structures of the Central Yangtze River 楊子江 region from the Chu period to the Qin-Han 秦漢 period, and attaches great importance to the emergence and formation of a double-door in the tomb. During the Warring State Period, burial chambers became more complex. Decorative windows and miniature double-doors emerged in the partition boards so the deceased's soul could move around in the Guo 槨 structure. These realistic miniature double-doors, together with spaces in the burial chamber, were meant to be equivalent to those in real houses; the world of the spirits was meant to be just the real world. In this way, Chu tombs moved earlier than those in any other areas to open up the traditionally closed burial chamber.

In the Qin-Han period, these miniature double-doors were adopted in tombs in other regions as well. In larger tombs, a main entrance that led outside of the burial chamber appeared. A separate room for rituals under the ground brought the world of the dead person in contact with the outside world. Later on, medium and small-sized tombs also incorporated an opening between the burial chamber and the passageway into the tomb. This formed the basis for typical Han-period tombs in which new rituals were performed underground in front of the deceased. These new rituals allow us to see how widespread Confucian practice 儒教 had become in the Han dynasty.